

令和 6 年 3 月 26 日	病虫害発生予報 4 月号	茨城県病虫害防除所
--------------------	-------------------------------	-----------

機械での転落・転倒・はさまれなど農作業事故が増加する季節です。

危険箇所を確認し、余裕を持った作業を行いましょう。

＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病虫害】	
イチゴ：アザミウマ類・・・・・・・・・・・・・・・・	1
促成・半促成ピーマン：アザミウマ類・・・・・・・・	1
促成トマト：黄化葉巻病（タバココナジラミ）・・・・・・・・	2
○トマト苗等でのトマトキバガの発生に注意しましょう。・・・・・・・・	2
【その他の病虫害】	
イチゴ、促成ピーマン、促成トマト、促成キュウリ、春ハクサイ、春レタス・・・・・・・・	3
○サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期～植付期）・・・・・・・・	4
○水稻における紋枯病の防除対策について・・・・・・・・	5
○イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除について・・・・・・・・	6
【防除所レポート】	
県央地域におけるヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率について・・・・・・・・	6
麦類赤かび病の防除を適期に行いましょう！・・・・・・・・	7
チャバネアオカメムシの越冬状況（令和6年2月調査）・・・・・・・・	9
II. 今月の気象予報 ・・・・・・・・	10

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>) で確認することができます。

詳しくは、病虫害防除所へお問い合わせ下さい。Tel :0299-45-8200

ホームページでは病虫害・フェロモントラップ・農薬関連情報がご覧いただけます。

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>



※病虫害の発生状況や、適切な防除方法は地域により異なる可能性があります。病虫害の防除や農薬についてのご相談は、お住まいの都道府県にある病虫害防除所等の指導機関にお問い合わせください。

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、寄生花率（本年値 14.2%、過去7年平均値 2.4%）は平年より高く、発生地点率（本年値 70%、過去7年平均値 33%）は平年よりやや高い～高い。
- ② 気象予報によると向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速いので、花をよく観察し、発生が少ないうちに防除を徹底する。気温の上昇に伴い、密度が急激に増加するため注意する。
- ② 薬剤散布は、十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

促成・半促成ピーマン

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	平年並 (促成ピーマン)	鹿行地域
	多い (半促成ピーマン)	

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、促成ピーマンにおける寄生花率（本年値 49.0%、平年値 55.7%）、一花あたりの寄生虫数（本年値 4.4頭、平年値 4.6頭）ともに平年並である。
- ② 3月中旬現在、半促成ピーマンにおける寄生花率（本年値 56.5%、平年値 34.7%）は平年よりやや高く、一花あたりの寄生虫数（本年値 8.1頭、平年値 2.9頭）は平年より多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速く、各種ウイルスを媒介するので発生が少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が花や果実にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ 天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

促成トマト

1. 黄化葉巻病（タバココナジラミ）

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月中旬現在、発病株率（本年値 0.6%、平年値 0.04%）、発生地点率（本年値 20%、平年値 2%）ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病株は見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ② 媒介虫であるタバココナジラミの施設内への侵入および施設外への飛び出しを防ぐため、開口部に 0.4mm 目合い以下の防虫ネットを設置する。破損がある場合は必ず補修する。
- ③ 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、タバココナジラミ成虫を捕殺する。
- ④ タバココナジラミは多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑥ 黄化葉巻病耐病性品種は、発病は抑制されるが、トマト黄化葉巻ウイルスに感染して本病の伝染源になるため、タバココナジラミの防除は感受性品種と同様に行う。

トマト苗等でのトマトキバガの発生に注意しましょう。

トマトキバガは、近年、日本に侵入してきた新しい外来害虫で、ナス科の植物を好み、トマト等を食害します。

茨城県では、令和 5 年 10 月にフェロモントラップ調査において、初めてトマトキバガ成虫の誘殺が認められました。その後、11 月末までフェロモントラップ調査を行ったところ、県内 4 地点中 3 地点において、計 5 頭の成虫が誘殺されました。

秋田県においては、フェロモントラップ調査において令和 5 年 10 月に 100 頭を超える成虫の誘殺が認められ、トマト本圃の調査でも幼虫による食害が認められたとの報告がありました。また、令和 6 年 3 月中旬には、幼虫によるトマト苗の子葉と本葉への食害が確認され、食害が進むと、生長点の枯死も認められました。

（令和 6 年 3 月 22 日秋田県病害虫防除所 発表 防除対策情報 第 20 号）

現在のところ、本県での農作物での発生および被害は認められていませんが、今後の発生に注意し、圃場をよく観察してください。

また、トマトキバガのハウス内への侵入を防ぐためには、ハウス開口部に防虫ネット（目合い 0.8mm 以下）を設置することが効果的です。

トマトキバガの発生が疑われた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センター、病害虫防除所に連絡してください。

（令和 5 年 10 月 24 日発表 病害虫発生予察特殊報 第 1 号 参照）

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
	アブラムシ類		
	コナジラミ類		
	ハダニ類	発生量：少ない	3月中旬現在、平年より少ない発生である。 気温の上昇に伴い、増殖が早くなるので注意する。
促成ピーマン	斑点病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
	コナジラミ類	発生量：やや多い	3月中旬現在、平年よりやや多い発生である。
促成トマト	黄化病	発生量：やや多い	3月中旬現在、平年よりやや多い発生である。媒介虫であるコナジラミ類の防除を徹底する。
	灰色かび病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
促成キュウリ	退緑黄化病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。
	べと病		3月中旬現在、平年並の発生である。
	うどんこ病	発生量：やや少ない	3月中旬現在、平年よりやや少ない発生である。
	アザミウマ類	発生量：平年並 ～やや多い	3月中旬現在、ミカンキイロアザミウマは平年よりやや多く、ミナミキイロアザミウマは平年並の発生である。
春ハクサイ	軟腐病	発生量：やや多い	3月中旬現在、平年よりやや多い発生である。
春レタス	菌核病	発生量：平年並	3月中旬現在、平年並の発生である。
	腐敗病		

サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期～植付期）

サツマイモが本病に感染・発病すると、栽培中に地上部の茎葉が枯死し、地下部の塊根（イモ）は腐敗します。また、周囲の健全な株にも病原菌が伝染するため、本病が圃場内にまん延し、大きな減収を招きます。

育苗期から生育期、収穫期から貯蔵期まで、年間を通して発生するおそれがあるので、本病の侵入防止と早期発見に努めましょう。

【病気の特徴】

糸状菌（かび）により引き起こされ、保菌した苗・イモ・残さ（畑に残った葉や茎、イモ）等が伝染源となる。貯蔵中のイモではなり首側からの変色や腐敗、苗床では葉巻や株の萎縮、葉の変色、苗基部の黒変等の症状が発生する。見かけ上は健全な苗やイモでも保菌している可能性があり、注意が必要である。

【防除対策】

1. 育苗にあたっての注意

- ・ 苗の増殖は、ウイルスフリー苗を用い、土壤消毒を行った圃場で行う。
- ・ 来歴が不明な種イモや切苗は絶対に使用しない。
- ・ 多発生地域からは、種イモや切苗を持ち込まない。
- ・ 生産者間で種イモや切苗の譲渡等を行わない。
- ・ 苗床に本病の発生が確認された場合は、速やかに関係機関へ連絡し関係機関の指導の下、発病株を施設外に持ち出し、適切に処分する。

2. 作業にあたっての注意

- ・ 発生地域と行き来のあったコンテナ等は、洗浄、消毒してから使用し、残さや土を圃場に持ち込まない。
- ・ 作業する圃場ごとに、農機具や長靴等についた土は良く落とし、水で良く洗浄する。

3. 健全苗を確保するために

1) 苗床・育苗準備時の対応

- ・ 種イモから苗を増殖する場合は、病害等が発生していない圃場で生産されたイモを選別して用いる。伏せ込む前の種イモは消毒を行う。

2) 採苗時の対応

- ・ 採苗時のハサミはこまめに消毒を行い、苗は地際から 5 cm 以上の位置で切る。
- ・ 採苗した苗は、採苗当日に速やかに苗消毒を行う。
- ・ 苗消毒用の薬液は、使用当日に調製し、登録の内容に従って浸漬処理を行う。

3) 購入苗への対応

- ・ 切苗を購入する時は、基腐病対策が徹底されていることを販売店に確認し、未消毒の場合は購入後に必ず苗消毒を行う。

4. 侵入に備えた対策

- ・ 排水の悪い圃場は、本病が侵入した際、発病しやすい傾向があるため、明きょ設置や耕盤破砕、枕畝の途中に排水溝を設置するなど、排水対策を徹底する。
- ・ 圃場ごとに植え付けた苗の苗床の場所や採苗日、ウイルスフリー苗などの購入先を記録する。

※本病が疑われる症状を見つけた場合は、速やかに各地域の農業改良普及センターまでご連絡ください。

茨城県総合防除計画におけるサツマイモ基腐病の遵守事項

茨城県では、全国的に発生しているサツマイモ基腐病について、すべての農業者（家庭菜園を含む）の皆様を守っていただくルール（遵守事項）を定めました（令和5年4月1日に施行された改正植物防疫法に基づくものです）。

○遵守すべき事項

- ・県が実施するまん延防止のための調査に協力する。
- ・本病の発生を確認した場合には、関係機関へ連絡し、関係機関の指導の下、発病株を抜き取り、圃場（苗床を含む）外に持ち出す。
- ・本病発生圃場では、2年間、サツマイモを作付けしない（関係機関の指導の下、栽培管理する場合を除く）。
- ・本病発生圃場から種イモを採取しない。
- ・本病発生圃場では、発生の拡大が無いことを確認する。

水稻における紋枯病の防除対策について

水稻の紋枯病は、イネの病斑上に形成された菌核が圃場にとどまり次作の伝染源となるため、毎年同じ圃場で発生しやすい傾向があります。近年、発生が認められている圃場では特に注意して対策を行いましょう。

[特徴]

前年の被害株や畦畔等の罹病雑草に形成された菌核で越冬し、伝染源となる。菌核は代かき時に水面に浮上し、株元に漂着する。気温が上昇し、株間の湿度が高くなると、菌核から発芽した菌糸が伸長して葉鞘内に侵入し始め、楕円形病斑をつくる。本病にかかると、下葉からしだいに枯れ上がり、稲の茎が弱くなって倒伏しやすくなる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 代かき時の浮遊物に菌核が混入しているので、畦畔沿いにたまったごみを取り除き、適切に処分する。
- ② 常発圃場では育苗箱施用剤を使用する。
- ③ 窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないようにする。

イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除について

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、多発すると減収する病気です。発病してからの治療はできないため、ヒメトビウンカの防除が重要です。

本病は、平成 26 年頃以降、県西地域を中心に発生が多くみられています。

例年、県西、県南地域でヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率を調査しており、本年の調査結果でも、保毒虫率が高い地点が認められています。保毒虫率の高かった一時期と比較すると、本年の保毒虫率は低い値を示していますが、ヒメトビウンカの発生量が多くなると、イネ縞葉枯病が再び増加するおそれがあるため、引き続き総合防除により本病の防除を徹底しましょう。

（令和 6 年 3 月 21 日発表 病害虫速報 No. 3 参照）

防除所レポート

【県央地域におけるヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率について】

例年、県西・県南地域で調査しているヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率（以下、保毒虫率）を、県央地域 2 地点においても調査を行いました。

その結果、令和 6 年は、2 地点とも、農業研究所作成のマニュアルにおいて、育苗箱施用等による薬剤防除を推奨する保毒虫率 5% 以上の高い値となりました（表）。

以下の防除対策を参考にして、イネ縞葉枯病の防除対策を行いましょう。

表 ヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率

地域	調査地点	保毒虫率 (%) ¹⁾	
		令和5年	令和6年 ²⁾
県央	水戸市 杉崎町	4.3	6.4
	那珂市 鹿島	4.8	7.4

1) 水田畦畔等より採集、簡易ELISA法により検定

2) 採集日：令和6年2月2、7、9日 検定日：令和6年3月6日

サンプル数：各地点188頭

【防除対策】

- ①本病の発生の多い圃場ではヒメトビウンカ防除を目的とした薬剤の育苗箱施用を行う。
- ②本病の発生の多い圃場で、育苗箱施用を行わなかった場合は、6月中下旬頃のヒメトビウンカ幼虫を対象とした本田防除が有効である。
なお、5月下旬発表予定の病害虫発生予報 6 月号で本田での防除適期等の情報を提供する予定である。
- ③保毒虫率を高めないために、収穫後には、地域全体で早めの秋季耕起や冬季の畦畔除草等の耕種的防除を徹底する。
- ④縞葉枯病抵抗性品種は本病をほとんど発病せず、保毒虫率を徐々に下げる効果が期待できるため、抵抗性品種の導入を検討する。

（令和 6 年 3 月 21 日発表 病害虫速報 No. 3 参照）

麦類赤かび病の防除を適期に行いましょう！

表に、3月中旬時点での農業研究所および病害虫防除所の調査圃場における予測出穂期と赤かび病の防除適期を示しました。予測出穂期は、今後の気温が平年並に推移した場合の計算値です。

気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、出穂期が早まる可能性があります。また、3月の低温により幼穂が凍害を受けた圃場では、不稔粒が発生することで赤かび病に感染しやすくなっています。これらのことから、圃場毎に生育ステージを確認し、赤かび病の適期防除に努めましょう。

[現在の状況]

- ① 3月中旬現在、農業研究所および病害虫防除所の調査圃場における大麦の予測出穂期は、3月下旬～4月中旬（表）である。
- ② 予測出穂期から算出した予測防除適期を表に示した。なお、今後の気温が平年より高く推移した場合、表に記載した出穂期および防除適期は、数日早まる可能性がある。

表 オオムギの予測出穂期と赤かび病の予測防除適期

麦種	品種	地域	調査地点	播種期	予測出穂期 ¹⁾	予測防除適期 ²⁾
六条大麦	カシマゴール	県央	水戸市小林町	11/14	4/15	4/18
		県南	龍ヶ崎市大徳町	11/ 9	3/24 ³⁾	3/27
			河内町源清田	11/22	4/15	4/18
			常総市豊田	11/14	4/ 5	4/ 8
		県西	筑西市伊讃美	11/15	4/17	4/20
			筑西市小栗	11/ 5	4/ 4	4/ 7
	カシマムギ	県南	龍ヶ崎市大徳町	11/ 9	3/30 ³⁾	4/ 2
		県西	八千代町高崎	12/ 1	4/17	4/20
二条大麦	ミカモ ゴールドデン	県央	那珂市飯田	11/15	4/17	4/29～5/ 1
		県南	龍ヶ崎市大徳町	11/ 9	3/26 ³⁾	4/ 6～4/ 8
			稲敷市佐原組新田	11/16	4/ 7	4/19～4/21
		県西	筑西市小栗	11/27	4/18	4/30～5/ 2
			桜川市大国玉	12/ 5	4/22	5/ 4～5/ 6

1) 農業研究所ホームページに掲載されている「麦類主要品種の主稈長による茎立ち期、幼穂長による出穂期予測法」の計算式を用いて予測した。各調査地点付近のアメダス観測所（日平均気温）は、予測計算日前日までの実測値及び予測計算日以降の平年値を用いた。

2) 予測防除適期は、六条大麦は出穂期の3日後、二条大麦は出穂期の12～14日後とした。

3) 農研速報（3月12日発表）のデータを用いた。

[防除対策]

- ① 防除適期は、六条大麦では出穂～穂揃期に開花を確認した時（出穂期の3日後頃）、二条大麦では穂から葯殻が出ていることを確認した時（出穂期の12～14日後頃）である（図）。予測される出穂期及び防除適期は麦種や播種期によって異なるため、圃場ごとに出穂状況を確認して適期に防除する。
- ② 赤かび病菌の子のう胞子の飛散好適条件は、「日最低気温 10℃以上、日最高気温 15℃以上の条件を満たし、降雨日とその翌日か湿度 80%以上の日」である。飛散好適条件が続く場合や不稔粒の発生が懸念される場合は、1回目の薬剤散布 7～10 日後に 2 回目の散布を行う。
- ③ 薬剤を選定する際は、使用回数や収穫前日数に十分注意する。また、2 回以上散布する際は、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤を用いる。

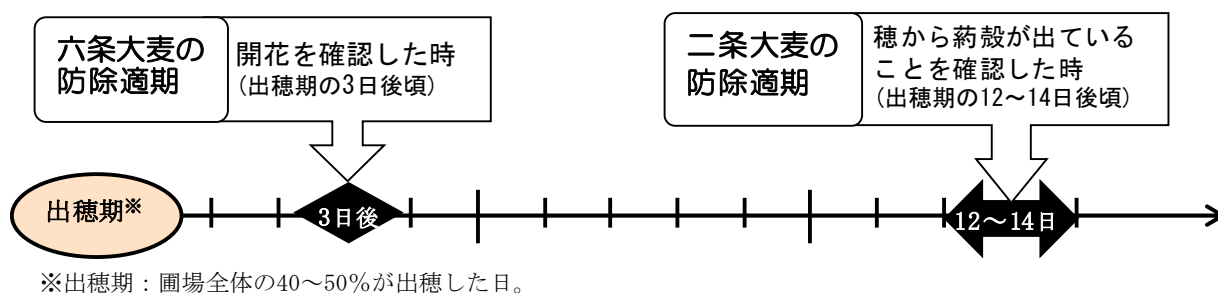


図 大麦赤かび病の防除適期

【お知らせ】

小麦の予測出穂期および赤かび病防除適期については、4月上旬に病虫害速報での発表を予定しております。防除所のホームページ等からご覧ください。

チャバネアオカメムシの越冬状況（令和6年2月調査）

ナシ、カキ、リンゴなどの重要害虫であるチャバネアオカメムシ（写真）の越冬数の調査結果をお知らせします。

本年2月上旬頃に山林の表層土を含んだ落葉を1地点当たり30リットル採取し、チャバネアオカメムシ成虫の越冬数を調査しました。落葉の採取は常陸太田市、水戸市、笠間市、小美玉市、茨城町、行方市、鉾田市、石岡市、つくば市、桜川市の合計42地点で行いました。

その結果、越冬成虫数（本年値9.7頭、平年値1.9頭）は平年より多く、越冬地点率（本年値86%、平年値40%）は平年より高くなりました（表）。

本年を含む過去11年間の越冬状況の推移をみると、越冬成虫数・越冬地点率ともに多い年と少ない年を交互に繰り返しており、本年は多い年にあたります（図1）。そのため、越冬世代成虫の果樹園への飛来数（4～7月）は、平年より多いと予想されますので、注意が必要です。

また、昨年のチャバネアオカメムシの予察灯への誘殺数は、4月から7月までは平年並、8月、9月は平年より多くなりました（図2）。また、クサギカメムシの誘殺数も平年より多く、平年、発生量の少ない温暖性のカメムシのツヤアオカメムシ、アオクサカメムシの発生も平年より多くなりました（データ省略）。

病虫害防除所では果樹カメムシ類について、予察灯調査（4～10月）や、サクラにおける発生量調査（4～5月）を行いますので、今後発表する情報を参考にしてください。

表 チャバネアオカメムシの越冬状況

調査項目	令和6年2月		平年
	調査値	順位 ²⁾	調査値
越冬成虫数(頭) ¹⁾	9.7	1位	1.9
越冬地点率(%)	86	1位	40

1) 成虫数／落葉30リットル当たり

2) 本年を含む過去11年中の順位



写真 チャバネアオカメムシ（成虫）

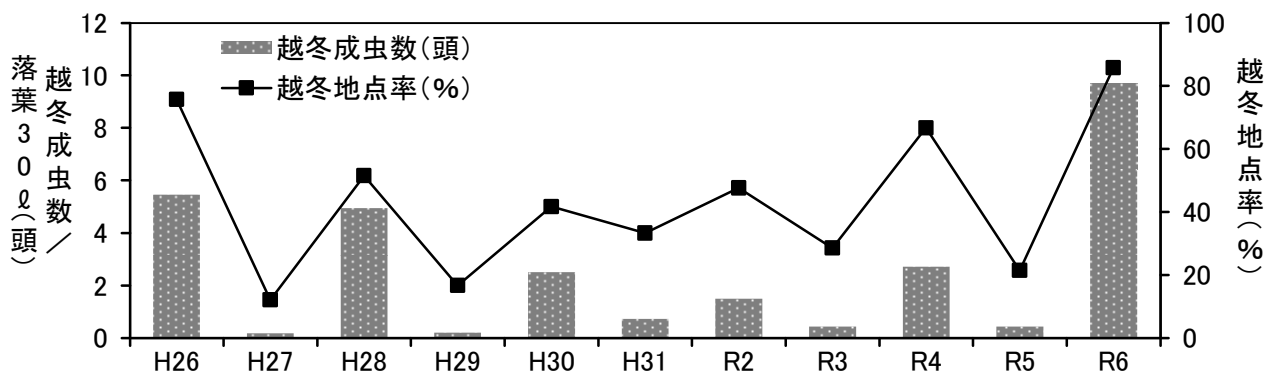


図1 チャバネアオカメムシの越冬成虫数及び越冬地点率の年次変動

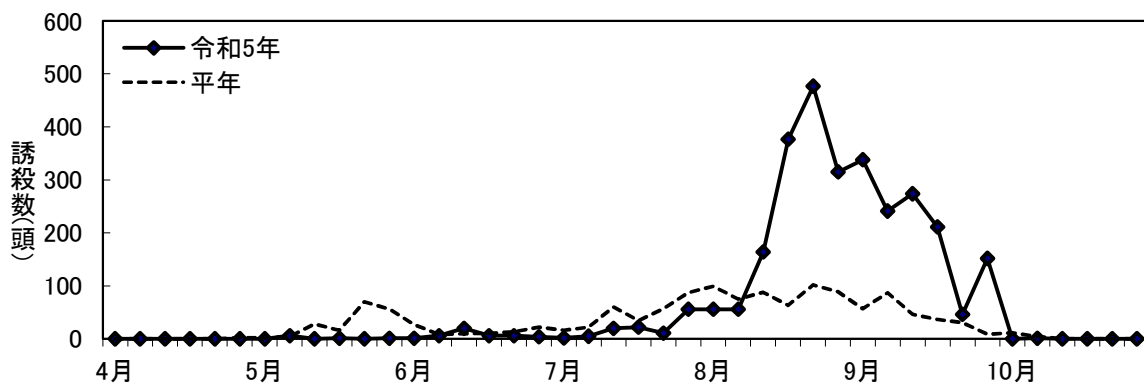


図2 チャバネアオカメムシの予察灯への誘殺数（かすみがうら市）

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 3 月 23 日から 4 月 22 日)

気象庁 (3 月 21 日 発表)

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	関東甲信全域	10	20	70
降水量	関東甲信全域	20	40	40
日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

< 1 週目の予報 > 3 月 23 日 (土曜日) から 3 月 29 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 60%

< 2 週目の予報 > 3 月 30 日 (土曜日) から 4 月 5 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 60%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 4 月 6 日 (土曜日) から 4 月 19 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 50%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散 (ドリフト) しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類※ (FRAC コード、IRAC コード) の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。